

肺炎ワクチンの
効果高める手法

筑波大など発見

筑波大学などの研究グループは、肺炎による死亡の半数を占めるとされる肺炎球菌などのワクチン効果を高める手法を突き止めた。従来のワクチンは効きにくいことが問題になっていたが、その原因をマウスの実験で解明した。研究成果は効果

的な新しいワクチン療法の開発につながる。

筑波大の渋谷彰教授と本多伸一郎講師、大阪大学、福島県立医科大学の共同研究で、米科学アカデミー紀要（電子版）に論文が掲載される。

研究グループはIgMと呼ばれる抗体の刺激を受け取る免疫細胞表面の受容体という部分を調べ、これが免疫力を左右していることを見つけた。

た。受容体を邪魔する物質を開発すれば、効果の高いワクチンになる可能性があるという。